

平成26年度第2回「大村知事と語る会」要旨

1 日 時 平成26年8月26日（火）午後2時30分から午後4時30分まで

2 場 所 栄ガスビル 5階 ガスホール

3 テーマ 次代のモノづくりを支える人材の育成

－技能五輪全国大会を契機とした人材の育成！－

4 発表者（発表順、敬称略）

株式会社デンソー技研センター 技能開発部長 塩崎秀正、田上俊一、高峰征希

コンドウ建築 代表 近藤博樹、近藤孝則

愛知県立豊田工業高等学校 校長 若山和彦

【大村知事】

皆様、こんにちは。愛知県知事の大村秀章でございます。

本日は、知事と語る会の第2回目ということでございますが、こうして多くの皆さんにご参加をいただきましてまことにありがとうございます。この会は、その時々テーマについて、第一線で活躍をしていただいている皆さんをお招きいたしまして、さまざまなご意見を直接お聞きし、今後の県の施策に生かしていこうということで、年に3回開催をいたしております。

今年は11月に大変大きなイベントが2つありまして、前半はESDユネスコの世界会議ということで、前半はユネスコの人づくりの世界会議を名古屋で行いまして、第1回の知事と語る会は、先般、高校生の皆さん、4つの高校の皆さんにESD、環境とか、国際理解とか、そういったことで活躍している高校生の皆さんに発表していただき意見交換いたしました。

そして、11月の後半は技能五輪の全国大会と障害者の技能競技会全国大会、アビリンピックをあわせて開催いたします。11月21、22、23日と障害者の技能競技会、アビリンピックを金城埠頭のポートメッセなごやで3日間開催をいたしまして、そして、その後11月28日から4日間、この技能五輪全国大会を県内8つの市、13会場に分かれて開催をするということでございます。会場数、種目、そして参加の選手も1,000人を超え、そして参加していただく方、視察をしていただく方、応援していただく方を含めて全部で18万人を超えるのではないかと。過去最大規模になるということは間違いのないと思っております、名実ともに技能王国、日本一の産業県愛知を支える技能士のまさに粋を集めた過去最大の大会にしていきたいと思っております。

そういう技能五輪、アビリンピック全国大会の開催までいよいよあと87日となりました。この

技能五輪をもっともっと大いに盛り上げていきたいという思いも込めまして、今日は第2回の知事と語る会ではこの技能五輪にちなみまして、次代のモノづくりを支える人材の育成ということテーマにお話をいただき、意見交換をさせていただくことになったわけでございます。

今日は、株式会社デンソー技研センターさんからは技能五輪の関係のこと、そして、コンドウ建築さんからも伝統工法を活用した建築技術のこと、そして、また愛知県立豊田工業高校の校長先生からは、そうした子供たちへの指導、そして、また今年4月に国のほうからスーパー・プロフェッショナル・ハイスクールの指定を受けたわけございまして、まさに技能教育の最先端を走っておられる豊田工業高校の現状をご報告いただければと思っております。

今日はユーストリームでライブ中継もいたしておりますので、それも含めまして大いに今日の語る会が実りの多いものになりますように心からご祈念、ご期待申し上げまして、冒頭私からのご挨拶とさせていただきます。何とぞよろしく願いいたします。

【司会】

それでは、発表に移りたいと思います。

最初に発表していただくのは、株式会社デンソー技研センターにおける取組についてです。塩崎秀正さん、田上俊一さん、高峰征希さん、どうぞ前にお越しく下さい。

デンソー技研センターは、昭和29年に設立されたデンソーの技能者養成所を前身とする人材育成施設であり、平成13年に株式会社となっています。デンソー技研センターでは、時代、環境の変化に柔軟に対応できる技術・技能者の育成を目指した教育を行っています。技能五輪の選手の育成にも力を入れており、技能五輪全国大会や国際大会でも数多くのメダルを獲得しています。

それでは、発表をよろしく願いいたします。

【塩崎】

皆さん、こんにちは。今回はこのような機会をいただき、どうもありがとうございます。私たちはデンソー技研センターから参りました塩崎と田上、またデンソーから参りました高峰の3人です。どうぞよろしく願いいたします。

今日は、デンソーの技能五輪への取組について、概要のほうを私が、技能五輪を通しての経験、学びのほうを第34回技能五輪国際大会、1997年のスイス大会の精密機器組立て職種の田上君から、もう一人、技能五輪への挑戦と題して、2013年、昨年ドイツで開催されました国際大会でのプラスチック金型職種の金メダリストの高峰征希君より発表をさせていただきます。

まず、デンソーの製品ですが、このような車の部品を製作しています。後ほどご紹介をさせていただきますが、これらの製品の中にも技能五輪のわざが多々盛り込まれています。

続いて、デンソーの教育ですが、デンソーは昔から非常に人材育成に力を入れておりまして、訓練生に対しては学園や又は技能五輪、また、一般の社員に関しましても固有技術講座や国家技

技能検定、また、海外では、このような形で海外拠点への学園の開設等を実施しております。技能五輪も人材育成の一つになります。

技能五輪には第1回から参加しておりまして、愛知県の代表ということで参加するたびに毎回このような愛知県のユニホームをいただいて全国大会に参加しております。私も1980年全国大会の精密機器組立職種で優勝しまして、そのときに県のユニホームを着て表彰台に上がったのを今でも鮮明に覚えています。現在は愛知県の選手団の副団長を拝命しており、団長の河村理事には大変お世話になっております。また、これから今回の全国大会もありますが、大村知事の会場のご視察等がありましたらご案内等をさせていただければというふうに考えております。

さて、話を戻しまして、デンソーの技能五輪の取組ですが、技能五輪の取組の狙いとしましては、強い精神力と豊かな創造力を持った高度熟練技能者の育成としています。

デンソーとしては、必要な技能分野からこれらの11種目に参加しています。選手のほうは技能五輪の全国大会、国際大会を通し、精度、速度、美観を追求する中で、高度熟練技能者として必要な資質である高い技能ややり抜く精神力、そして豊かな創造力を育成しています。技能五輪終了後は新製品の開発試作や新設備の開発、そういった高度熟練職場といったところに配属され力を発揮してくれています。

一例として、抜き型の修了生が開発してくれたインジェクタの紹介をさせていただきたいと思えます。これはガソリンの供給部品になるわけですが、この加工では100分の5ミリといった髪の毛よりも細いパンチで斜めの穴をあけることが必要です。なにぶんこのように細いパンチですので、すぐ折れてしまいますが、技能五輪で培った技能を生かし、マイクロ加工方法を開発し、製品化にこぎつけてくれました。こちらが噴霧状態ですが、ごらんのように微細孔により燃料の微粒化を実現できており、燃費の向上、また排ガスの低減と環境に非常に優しい製品づくりに貢献してくれています。

では、続きまして、精密機器組立ての田上君と抜き型職種の高峰君の発表に移らせていただきます。

精密機器は名前のおり精密な部品を製作し組み上げる競技で、全国大会では課題を公表され、7時間で競技をなし遂げます。国際大会になりますと課題は未公開になり、2005年からはポリメカニクスという電気を交えた競技に変更になりました。田上君が金メダルを獲得した1997年はまだ機械加工が主体の競技でしたが、この模様はNHKスペシャルでも放映されておりますので、何名かはご記憶の方もおみえになるかと思えます。

抜き型はこのようなプレス型を公表されたものを9時間30分で作ります。しかし、全国大会になりますと、ちょうど高峰君が国際大会に参加した前回の2013年からプラスチック金型に変更されまして、競技時間も20時間で実施されました。初の競技種目であり、なかなか大変な毎

日で、訓練も思うように進まなかったわけですが、今回金メダルを獲得し、ここまでの道のりをどうやって乗り越えてきたのか、そういった秘訣を踏まえながら発表をさせていただきます。

では、まず田上君、よろしくお願いします。

【田上】

ただいまご紹介にあずかりましたデンソー技研センターの田上といいます。どうぞよろしくお願ひします。

私は、現在の業務としましてはデンソー技研センターの技術研修部というところに所属しており、機械加工系の技能教育の指導員をしております。また、あいち技能マイスターも務めさせてもらっております。私は1990年にデンソー学園に入学しまして、卒業後から技能五輪の精密機器組立て職種の選手となり、97年のスイスで開催された技能五輪国際大会に出場しました。

自分にとっては技能五輪との出会いというのが人生にターニングポイントであったことは間違いなくて、技術とか科学なんかの裏に隠れがちな技能というものの重要性、必要性に気づくことができました。また、技能士という誇りを持てる仕事につくことができました。

では、まずは私の職種である精密機器組立て職種の紹介をさせていただきます。

精密機器組立て職種は、先ほどちょっと紹介がありましたが、フライス盤、旋盤、平面研削盤という3つの機械プラス手仕上げ作業という4つの技能を必要とする職種になります。身に付けなければいけない技能は多くはなってくるんですが、それが魅力となる、とてもおもしろい職種かなと思っています。

製作する課題はこの4つの技能を使用する職種ならではになるんですが、このようにハンドルを回すことで動きを持たせたような治具を模した課題になります。このようなアルミとか鋼、それから銅、黄銅といったものを機械を使って加工し、このような部品にし、これを組み付けてこのような課題になります。

採点項目としましては、部品寸法、組み付けた後の寸法、動き、外観、見ばえというところになります。そして、与えられた機械でつくれない手仕上げ職種特有の角孔という四角い穴が必ず課題の中にはありまして、こういう四角い穴は手仕上げ作業でつくるということになります。求められる寸法精度は1,000分の1ミリ単位で加工をしていきます。

そして、全国大会と国際大会ではちょっと競技形式が変わってきます。課題のデザイン性も少し変わってくるんですけども、全国大会では公開課題ということで数か月前に課題が公開されてそれをつくり込む。そして、競技当日1日で、7時間程度で加工をしていきます。部品部品が非常にきっちり合わさっておりますので、一つ一つの部品精度をしっかりとつくってこないと最終的に組み付け、動かすことができないようなものですね。

そして、国際大会のほうになりますと、未公開課題ということで大会当日にならないとどうい

ったものをつくるかというのが公表されません。そして、その分選手だけで加工手順などを考えながら競技を進めていきますので、競技時間としては20時間程度で4日間に分けて開催されます。自分で考え、そして組み付け完成させるというところが、今よく企業に必要な人材と言われていて自分で考え行動できる人というようなところにちょっとつながってきているのかなというのを感じております。

そういった違いがありまして、全国大会、それから国際大会両方に出場することで自分自身の技能の幅が広がり、自分の技能も育てることができたということで、ぜひ今年のあいち大会は国際大会の切符がかかっておりますので、選手の皆さんには頑張って国際大会を目指していただきたいなとも思っております。

私が国際大会に出場したときにNHKさんが取材に来ました。その大会中に出題された問題にミスがあるというアクシデントがありました。その様子と、現在私が携わっている技能教育についての2分ほどのVTRがありますので、まずそちらをごらんいただきたいと思います。ただ、VTRが十数年前のものになりますので、それはちょっとご了承いただいて見ていただきたいと思います。

(ビデオ上映)

このようなアクシデントがありはしたんですが、当時僕のヘッドコーチとして指導していたのがこちらの塩崎さんで、2人で国際大会に行ったんですが、日頃の訓練のたまものもあって、こういったアクシデントも何とか乗り越え、金メダルをとることができました。

こちらは国際大会のときの風景になります。機械加工、それから手仕上げ作業を、こちらも手仕上げですね。これが課題です。そして、メダル、賞状、表彰式の様子となっております。

図面にミスがありましたのは、ちょうどこのジョイント部分ですね。ここがちょっと組み付かなかった、届かなかったというようなミスになります。

現在は、選手を終わってからですが、技能教育の指導に就いています。人材育成、技能伝承というのが重要であることは言わずと知れたことで、非常に大切な仕事であると思い取り組んでおるんですが、技能五輪を通じて身に付けた技能でモノづくりをしたいという気持ちがやはりありまして、いつかは機械加工の職人として、モノづくりの現場で活躍したいというふうには思っております。

また、技能五輪は基礎技能の習熟でもありますので、その後というのがとても大切だと思っています。若者をさらに技能を伸ばせる環境に置いてやらないと、技能五輪で身につけた技能が無駄になってしまうということで、ぜひ技能五輪の選手の皆さんには訓練で培った技能を発揮できる、そして腕を磨き活躍できる職場、仕事に就いてもらいたいと思っておりますので、行政、企業さんにしてもそのような環境を整えて、より強い技能士の育成につなげていっていただきたい

というふうに思っています。

また、人材育成で言えば、あいち技能マイスター制度もその一つで、微力ながら協力させていただいてもらっています。自分の講演とか実演というのを聞いてくれていた学生がデンソー学園に入ってきてくれるということもありますので、そういったときには非常にうれしく思います。ですが、ここ数年あいち技能マイスターのメンバーが変わっていないと思いますので、ぜひ新たにまた任命等をしていただき、さらに広く技能振興を進めてほしいと思います。また、ぜひあいち技能マイスター同士の交流の場なんかがあったらうれしいと思います。

このモノづくり愛知での技能五輪全国大会をぜひ盛り上げて、愛知を発信地としてさらに技能振興が進むことを期待しています。あと3か月後に全国大会になりますが、どんどんPRをしていただいて、少しでも多くの人たちに技能五輪を見ていただきたいと思っております。

以上で私の報告を終わります。

【塩崎】

では、続いて高峰君、よろしくをお願いします。

【高峰】

皆さん、こんにちは。私は株式会社デンソーの高峰と申します。2013年に技能五輪国際大会に出場しまして、その後デンソー技研センターから株式会社デンソーに異動して、実際に今は仕事で金型というものを作成しております。

では、ただいまより技能五輪への挑戦ということで発表させていただきます。

まず、私が出場させていただきました第42回技能五輪国際大会の説明をさせていただきたいと思えます。

日には7月2日から7月7日で、ドイツのライプチヒという場所で行いました。このような会場で、私は日本選手団が出場するときの旗手を務めさせていただきました。そして、こちらが2013年国際大会に出場した日本選手団のメンバーです。ちなみに、そちらにいらっしゃるのと同じ日本選手団で出場した製図の河合さんという方で、今も交流させていただいております。

続きまして、私たち株式会社デンソーの説明をさせていただきますと、こちらが私の出たプラスチック金型の職種で、ほかにも海外から出た、デンソーのタイから出場した職種などがあります。こちらのメンバーは株式会社デンソーのメンバーで、このような実績を出し、参加メンバーは約1,000人ととても大きな大会となりました。

続いて、またVTRなのですが、私が出場したときの様子を見ていただきたいと思えます。

(ビデオ上映)

VTRの中でも指導員の方が言っていたんですが、国際大会に出場しましてやっぱりそのときにはふだんの作業とは同じようなことは絶対なくて、絶対どこかで何かしらのトラブルにぶつか

ると。そういうときにどれだけ対応できるかということがとても大切だというふうに言われ、その練習もしてきました。実際に本番であったのは、今まで練習で使っていたものがいきなり使えなくなったり、ルールの変更が行われたりということで、すごく自分の中でも混乱するということはあったんですが、その中でも一つ一つの作業にしっかりと冷静に対応し、そのイレギュラーに対応できるようになりました。

そして、現地での環境の変化や言葉の問題など常に不安はあり、とても緊張はしましたが、実際に国際大会に出場できるのは1人1回で、それからは一生出ることにはできないたった1回の大会です。なので、その大会には絶対に悔いを残さずしっかりと楽しもうと。せっかく出場できる大会を悔いが残らないような最高の4日間にしようという思いで本番に臨みました。実際にそのおかげで本番は大きなミスもなく、練習どおりのものができ、金メダルをとることができました。こちらとこちらが実際の競技の風景となっています。

そして、最後に感想と抱負なのですが、やはり自分のために多くの人たちに協力していただいたので、感謝の気持ちというものが一番大きく残っています。世界一を争うという機会はほんとうに人生の中で1回体験することができるかできないかというとても貴重な体験だったので、それを出すことができる、自分自身の力がどれだけのものなのかということを確認することができるほんとうに最高の場所だったんじゃないかなというふうに思っています。

そして、こちらが先ほどと同じ日本選手団なのですが、やはり同じように日本を背負って戦った仲間、実際に一緒にいた期間は2週間程度しかなく、実感としては短いんですが、ほんとうにこれからもずっと一緒に支え合っていける大切な宝だと思っています。

そして、最後に抱負なのですが、技能の伝承という部分で自分の学んだものをしっかりと後輩に伝えていき、後輩がまた同じように世界一、日本一というものをとっていけるように、自分自身の技能をしっかりと伝承していければいいなというふうに思っています。そして、自らを高めるといふ部分で、今後は実際に今職場に出て金型をつくっているのですが、この技能五輪というものを通して学ばせていただいた自分自身の諦めない心だとか、創意工夫という思いをしっかりと持ってこれからも練習に励んでいきたいと思っています。

以上で終わります。ありがとうございました。

【大村知事】

ありがとうございました。盛りだくさんのご報告をいただきましてありがとうございました。

ご報告に尽きるかと思いますが、全国大会、そしてまた国際大会で金メダルをとったお二人にお聞きしたいんですが、この技能五輪の大会に出場する、それを目指した理由と、そして、そのときに日々ほんとうにつらい、毎日毎日厳しい練習というか、日々精進の中で、先生というか、指導者の方も毎日多分むちゃくちゃ厳しいと思うんですけど、そういう厳しい日々を、精進を積

んできたときに何か心掛けたこととか、何を目標にしたのか。そういった心構えというか、取り組み方というのをそれぞれ田上さん、高峰さんにお聞かせいただければと思いますが、いかがですか。まず田上さん、どうぞ。

【田上】

まず、技能五輪に挑戦するきっかけは、デンソー学園では高校2年生のときに技能五輪の候補生ということで候補生を決めます。僕が2年生のときに精密機器組立て職種に2名選手をとったんですが、1名枠が空いていまして、それで担任の先生にやってみないかと言われたのがきっかけでありまして、僕自身は学園生のときに実技の成績があまりよくなかったので、僕自身の中では技能五輪に進もうという気持ちは当時はありませんでした。担任の先生が背中を押してくれて挑戦したというのがきっかけになります。

技能五輪の訓練に取り組んでいますとすごく楽しかったです。ですので、訓練のほうも大会の前になりますと会社に泊まり込んで訓練をしたり、休日を返上して訓練したりということにはなるんですが、自分の中では趣味のような感じで、ほんとうに訓練には取り組むことができました。

そして、目標としていたのはやっぱり先輩の姿ですね。僕が国際大会に出たときはデンソーの国際大会3連覇目がかかっていた年で、やはり先輩に続きたい、そして、高峰君も言っていましたが、1回しか出られない国際大会でどうしてもいい成績を上げたいという気持ちですね。また、僕が3連覇をとって4連覇目をぜひ後輩にという、そういった気持ちで頑張りました。

【高峰】

僕の場合は少し田上さんのときとは違って、僕が中学校2年生くらいのときにテレビで、田上さんではないんですが、NHKのスペシャルで技能五輪の国際大会をやっているのを見まして、自分自身はすごくモノづくりが好きだったので、どこかの工業高校に入ってそのまま物をつくれるようになったらいいなというふうには思っていたんですが、それを目指して自分の力をしっかりと試せる場所があるんだということを知ることができ、そのときにせっかくやるんだったら自分の力がどれだけできるのかというものを試したいという思いがあり、株式会社デンソーに入り、先ほど言っていた候補生になり、実際に技能五輪の選手とさせていただきました。それが自分としての技能五輪をやりたいと思ったきっかけです。

実際に技能五輪をやっていく中ですごく感じたことというのは、自分自身がほんとうに訓練だけというか、わざを磨くだけではなく、すごくその中でいろいろなものを学ばせていただきまして、ほんとうに課題の途中で失敗することもあるんですけど、その中でいかにして巻き返しができるようにするかとか、その中でいかに自分の中の集中力を切らせないかというものはすごく自分の中の思いとしてありました。

実際に大会に出場するときは、ほんとうに自分は多くの人たちの助けをかりて全国大会に出場

し、国際大会の訓練にもいろいろな、先ほども多くの指導員の方がいらっしやっただと思うんですけど、その方々や自分の私生活やいろんなところで支えてくれた人がいました。そして、自分自身のモットーとして、思いを必ず実現するという、絶対に願ったことは、本気で願ったことは実現するんだということがあるので、実際にその体験者になりたいという思いがすごく強かったので、ほんとうにその思いがあったのが技能五輪を通して、それを実際に自分自身が体感することができたので、それが僕の中で技能五輪をやった中で大きく学べたことなんじゃないかなというふうに思います。

【大村知事】

ありがとうございました。

最後に塩崎部長から、こうして若い人たち、学園からこうした技能五輪に参加して選手を養成し、そしてずっとやってこられたわけですがけれども、これまでを振り返っての感想というか、思いと、そしてまた今後これからもずっと取り組んでいかれると思いますが、それへの思いというか、考えというか、そういったものをぜひお聞かせいただければと思います。

【塩崎】

今までずっと技能五輪のほうに関係させていただきまして、その中で一番強く思っているのは、やっぱり人間って非常に個性がありまして、その個性に対応するのが大事だなというふうに考えています。同じ訓練でもやっぱり人によってうまくいく人、いかない人が出てくるわけなんですね。

今回の2人を比べてみるとほんとうに如実なんですけれども、高峰のほうは第1回目で優勝と。田上のほうは1回目で4位、2回目の全国大会では同期に抜かれて、3回目の全国大会で後輩に抜かれて、それでも4年目をやる。じゃ、4年目をやる時には何を目標として持っていくんだと。そういうことを個人ごとにきちんと設定していく。それがないとやはり人って伸びていけないんじゃないかなというふうに思います。

そういった形では、田上はほんとうに牛歩のように進んだんですけども、もしそれを高峰でやったらやっぱりこういうふうには伸びていないと思います。個性に合わせた訓練をきちんと進めていくというのがやっぱり非常に大事だと思います。

また、今後もこういった関係の仕事が続けさせていただくことができれば、思いはほんとうに同じなんですけれども、これからも同じように人材育成をしっかり取り組んでいきたいと考えていますし、また、これから世代交代、今の若い人の考え方も非常に変わってきていますので、それに合わせた新しい訓練の進め方等を考えていく。また、教えた子たちが今度は自分のかわりとして次の世代を育てていく。そういった技能伝承をしていくことができれば自分としては非常に満足なんじゃないかというふうに考えています。

【大村知事】

ありがとうございました。今後ともぜひまた頑張ってくださいというふうに思っております。今年の大会も大いに期待をいたしております。ありがとうございました。

【司会】

どうもありがとうございました。

それでは、次の発表に移ります。次に発表していただくのは、コンドウ建築の近藤博樹さんと近藤孝則さんです。どうぞ前にお越してください。

コンドウ建築を営む近藤博樹さんは、建築大工としてのすぐれた技能により平成17年に優秀施工者国土交通大臣顕彰を受賞されています。また、職業訓練校の指導員や県の技能検定委員、各種講習会の講師として技術指導に尽力されています。さらに愛知県建設組合連合の会長も務めており、会員の技術技能の向上にも取り組まれています。また、ご子息の孝則さんも技術の継承に努められており、技能五輪全国大会で敢闘賞を受賞されています。

それでは、発表をよろしく願いいたします。

【近藤（博）】

ただいまご紹介いただきましたコンドウ建築の近藤と申します。どうぞよろしく願いいたします。

まず初めに、私たちの業界は非常に人材が減ってきているということを実は皆さんに知っていただきたいと思います。何でこんなになったかということから始めますと、木造住宅が今は建て方をするまでの作業は工場での加工作業が非常に多くなった。プレカットという言葉をよく聞かれると思いますけれども、実はこのプレカット材が使用されるようになった、30年以上前からそういう部材を用いての住宅建築が多くなってきたということです。

その中で、当初は実はやはりそんなに普及していなかったと。住宅建築の中で1割ぐらいがプレカット材であったのが、実はここ20年ぐらい前から急速に機械の性能も良くなったりとか、コンピューターの関係で打ち込んでしまうと精度のいいものが出てきた。数多くのプレカット工場が普及してきた。そういった点で、現在では新築住宅の9割ぐらいがこういったプレカット材によつての住宅建築に変わってきたということです。

そういったことによって、実は今まで自分の小さい頃、若い頃もそうなんですけれども、作業場において部材を、大きなものを入れて、まずどこに穴を掘るとか切る場所を決める、墨付け、そして加工するという作業をしていましたけれども、こういったことはなくても住宅がつくれるようになってしまった。ここに一番問題が出ておるんじゃないかなというふうに思います。

ということは、今まで何百年と伝わってきた建築大工の技術、墨付け加工といったこういった作業をしなくても住宅建築ができてしまう状況が起きてきた。ということは何かというと、工場

から来た部材を現場で組み立てて、あとは内装工事をするということで、実はあまり技術がなくてもできちゃうのかなというふうに思います。

ということは、仕事が多くなるようになってきた。若い子たちが体の元気なうちは、ぼこぼこ仕事をとって、どんどん住宅を建築して売り上げを増やしていく。もうピークでいくと年間百何十万棟という住宅が建築されていましたが、現在は年間四十何万棟まで、3分の1ぐらいまで減っておるということです。

そういったことで、若いうちしかできない今の状況が実はものすごく体力が要るよということに変わってきちゃっている。建築大工という職業が、じゃ、50を過ぎたときにこのまま続けていけるかという心配がある。そういった点で先が見出せないがために離職が多くなってきている。

実は建築大工になっても、40、45になってくると職をかわっちゃう人が今はデータを見ると非常に増えてきたということです。非常に悲しいことでして、一番建築大工が多かったのは、1970年に全国で85万人建築大工がいました。その40年後、2010年には40万人まで減少してしまった、半分以下まで減少した。最近でいいますと、2005年から2010年、この5年間に14万人も減少してしまったということです。それと、若い子たちの自分たちの職業に入職してくる方、20から24歳までの方が4分の1まで減少している。こういった状況が今起きております。

技能五輪の建築大工でも、実は選手はたくさん建築大工は出ていただけます。自分も代表になる選手を選ばせていただける立場におりますので、この段階では実はたくさんいるんです。いざ就職して建築大工になってというのと離れてしまう。この建築大工、以前は小学生、小さい頃はみんな大きくなったら大工になりたいという候補の中に必ず入っていました。全く最近では耳にすることはなくなりました。非常に残念です。

そういった点で、私たちの仕事、今後の課題はというと、やはり建築大工の地位向上、技術、技能、知識、こういったことは師匠から、親方から教えていただくことができるんですけども、そこにもう一つ、モノづくりに携わる人は当然だと思いますけれども、自分の持っている知恵、第六感というか、ここが建築大工が一番おもしろい、自分の個性の出せる職業だと自分は思います。

現在の住宅は、省エネだとか、耐震化だとか、こういったことはもう正直言って当たり前のようにつくられている状況でございます。在来工法の住宅というのは、伝統的な工法で行う住宅建築は一品作品であり、伝統工法の家づくりは全く2つと同じものがない。それぞれの個性を持った建物ができてきます。

ここに若干大工、将来大工を目指している学生の知恵とアイデア、いかに個性が出せる職業かということをちょっとPRしたいんですけども、そういった環境をつくるのが建築大工の魅力となって、木造住宅建築のすばらしさを伝えていけることが、また住宅の質の良さにつながっ

てくると思います。個性のある住宅が今後増えていくことを自分は是非とも願いたいと思います。

毎年ですけれども、高校生の技能コンテストがあります。自分もそこには何度か審査等をさせていただいておりますけれども、非常にすばらしい作品をつくれる生徒が多々います。そういった点で将来を見据えた魅力ある職業ですので、是非とも若い人たちに今回の技能五輪全国大会、豊橋の会場に出向いていただいて、数多くの若い子を刺激してこの職業のすばらしさを伝えたいというふうに思います。

それから、後継者育成ということでここ近年強く感じていることは、若い子を育てていくゆとりがなくなっていると自分は今感じております。ゆとりがないということは何かということ、実は仕事をいただくのに予算とか、工事期間とか、今のメーカーがつくる住宅等は非常に建て方から完成までが早いです。私たちのつくっている住宅はそうはいきません。特に今、木を強制的に乾燥させてつくる住宅がほとんどになっています。自社の作業場で墨付け加工していますと、生材を製材して墨付け加工ということで、実は木材の乾燥期間、今この地域の条件に合う乾燥までの時間が実は自分は欲しいと思います。そうすることによって狂うことのない住宅ができてくる。30年、40年たっても、50年たっても狂いのない、ひずみのない建物ができてくる。それで長寿命の住宅を提供することができます。

では、若い子たちに私たちが仕事を教えて指導したら仕事ができるかということ、技術、職場で違います。何度も何度も失敗と経験を繰り返して、そこには自分も育つ頃はいろんな壁を経験させていただきました。職人さん、先輩等に怒られながら何度も何本もの失敗を繰り返して、幾つもの壁を乗り越えて、この壁を乗り越えたときの自分の満足感というか、非常に大きいことを覚えております。そうって一人前の職業に就く建築大工になるということですね。

そういった点で、若い子を育てるのにゆとりがないということで、若い子に失敗をさせる親方の幅がなくなったということです。何度も失敗させるんだったら自分でやったほうがよくなっちゃうよと。何度も失敗させるんだったらできること、簡単な作業をさせようという、人材育成は非常に難しい。私たちのように自社で加工していたら、何度も失敗も経験させてやりたいと思います。そこには親方の、指導者のどこまでそれを辛抱できるか、我慢できるか、これがその子をいかに成長させるか。そこでいかに自分が目を離すことができるか。その失敗した子はものすごく次は成長していますよ。これは若い子を見ていると、自分の目から見るとひしひしと感じます。それを乗り越えると急にその子は成長します。幾つもの壁を乗り越えた子は決して我々の恩を忘れることはありません。

そして、親方というのは職人、弟子などを指導、保護する立場にある人のことを言うということで、最近では建設業、建築業に携わる社長さんが非常に多くなったように思います。それは職業の細分化により増えたというふうに思いますけれども、最近あまり聞かなくなった言葉という

か、人というか、最近自分が講座とかに行ったときにはちょこちょこ声を出させていただきますが、建築大工というのは棟梁、棟梁は木造の新築住宅をする上で施主さんとの平面プランから工事の工程、職人の采配とか業者の采配、こういった集団の指導的人物で、社長、親方、棟梁、それぞれ意味が違います。

親方というのはやはり弟子を仕込む立場にある人が親方であって、棟梁というのは住宅の全責任を受け負う、これが棟梁だと思います。営業が行って仕事をとって、次は監督さんが行って現場指導をしてというんじゃなくて、棟梁は全てそれを行います。そうすることによってもちろんお客さんからものすごく信頼されます。

お寺とか神社には必ず棟梁が采配して建物を完成させます。昨年伊勢神宮でご遷宮がありました。昨年の10月に神宮技師さんのお話を聞く機会がありまして、その中で、この神宮遷宮に当たって副棟梁は26歳の方が務めたと聞きました。さすがに僕はびっくりしましたね。26歳で。じゃ、この子はいつからこの職に就いたのか。中学のときに卒業と同時に親と一緒にここの地に来て、お願いしますと言って息子を置いていったと。それで10年後には副棟梁が務められたと。すばらしい子が現れてきておるなというのをひしひしと感じました。

最近では私たちのような仕事はもうきつとか、汚いとか、もしけがをしたらどうするんだとか、いろんなことを言われて、親御さんのほうが逆に心配されます。しかしながら、子供の夢を掴むようなことは是非ともしてほしくないと思います。夢であって子供の好きなことをやらせてやって、一生続ける仕事だというふうに思いますので。

木造住宅も棟梁の采配により全ての責任をもって完成させる。無事に完成させることによって信頼される。信頼ということ、信用と信頼とは違いますから、信じて頼りにされる棟梁になるということですね。今現在、建設業者が減少している中、建設現場では職人が非常に減っている。先ほども言いましたように、若手労働者がいない状況になったのは、やはりちょっと住宅の方向性が違っていったのかなと。建設関係の仕事が違っていったのかなというふうに感じます。

実はまいた種が芽を出したというふうに自分は思います。いい種をまけばいい芽が、悪い種をまけば悪い芽が、後継者の確保と育成には今後は是非いい種を自分もまいていきたいと思います。種をまいて手をかけて育てるということ、幾つもの試練を乗り越えたから奪われることのないモノづくりの技術、技能、知恵、持ち備えた自分の好きな、そして安定な職業であり、収入が多く、充実感のあるすばらしい職業であることが大切だということは今後も伝えていきたいというふうに思います。

是非とも今年の技能五輪には数多くの人に会場に来ていただいて、何か一つでもいいです、感じ取っていただいてモノづくり愛知の建築大工としての職を皆さんに知ってほしいと思います。今後も後継者育成には少しでも力になればというふうに感じておりますので、どうぞよろしくお

願いたします。技能五輪に愛知県からも5名ぐらいは出場しますので、是非、応援をしていただきたいと思います。本日はどうもありがとうございました。

それと、実はもう一人うちの息子が来ていまして、全国の削ろう会に入っていて、今日はここで一度薄いかんなくずを皆様に見ていただきたいなというふうに思います。

それと、今、後ろの入り口の角に置いてありますが、あれは昨年行われました技能競技大会、1級技能士を持っている方が全国の大会に出た技能競技大会の作品です。課題は実は住宅の屋根の一部を模したものでございますけれども、この問題はあやふやな問題で、屋根の一部というぐらゐの課題しか出ていなくて、あとはその選手の、競技に参加する人が自分で問題を考えて作った作品で、全国一になった作品です。くぎも一本も使っていないで、自分もこういった作品を見るのは、いろんな作品を見させていただきましたが、必ずくぎ、ビスは留めてやります。この作品は全く使ってありません。ぜひ帰りに一度見ていただきたいと思います。

それでは、今から薄いかんなくずを出すことを一度ちょっと見ていただきたいと思いますので、よろしく願いたします。ありがとうございました。

【近藤（孝）】

先ほどちょっと紹介がありましたが、かんなのくずというちょっとかつお節みたいなイメージだと思うんですけど、今、係の方が実際、昨日今日で僕が削ってきたものを配ってもらっているんですが、非常に薄くてちょっと破れちゃっているやつもあるかもしれないんですけど、ちょっと一度手にとってその薄さというのを見てもらいたいんですが、薄さを数字であらわすと僕が大体平均で100分の1ミリぐらゐなんですけど、全国大会で言うと1,000分の4ミリ、昨年の優勝が1,000分の4ミリでした。4ミクロンという単位なんですけど、なかなかそこまでいくには一筋縄じゃないので、まだ僕もぺいぺいなんですけど、一応ちょっとお見せしようと思います。

(かんながけ実演)

先ほど裏で調整させてもらったので、ちょっと一応出るようにはしておいたんですね。2ミクロン、1,000分の2ミリいうと名刺に10回巻きつけても名刺の字が見えるというふうに言われています。これはおそらく100分の1、10ミクロンぐらゐになると思うんですけど、なかなか愛知県で削ろう会で実際に削っているという方がなくて、僕も1年半ぐらゐ前に近くにいたものですから、自分でどんなものかと思ってお邪魔させていただいてやるようになったんですが、その方ももう全国でも名が通っているというぐらゐの方のところだったので、その方々とメンバー、グループをつくって今参加させてもらっているんですが、愛知県だとほんとうに10人を切るぐらゐ、僕らが大体6、7人でいつも出ていくので、さっきオヤジのほうから説明があった、あれを作った方も削ろう会に参加しています。

ほんとうに10人いないぐらゐで、ただ本大会となると全国から500人近くこの薄削りをしに集ま

ってきます。今年は11月に神奈川県の小田原市であるんですが、もともと削ろう会の発祥が愛知県だと言われております。なので、ぜひ近いうちに愛知県でないかなとは思っているんですが、それは運営側が決めることなので、何とも言えないので、もし今後愛知県であるようなら自由に間近で見させてもらえるので、そういうのも興味がある方はぜひ来ていただきたいなと思っています。

体験してみたい方はいますか。なかなか愛知県でやっている方はいないので、もしありましたら。

【司会】

我こそはという方はいらっしゃいませんか。よろしいですか。

【大村知事】

では私がやるよ。

(かんながけ)

【近藤（孝）】

なかなか引くだけにしても、一般の方がやられるとつながらずに出ちゃうんですけど、さすが知事です。ありがとうございました。

【大村知事】

ありがとうございました。私のオヤジも建築大工でございます。子供のころ以来久しぶりにやりましたが、かんなのこういうやつはうちに全部ありまして。もっと厚かったよ、こんなに薄くないよ。

孝則さんはこれをやってどのぐらいになるんですか。こういう削るのは。

【近藤（孝）】

今1年半ぐらいになります。

【大村知事】

そうですか。こんなに薄いのは初めて見た。普通るときは、もっと厚くざかざか削っていきますもんね。

【近藤（孝）】

これを仕事でやっていると、ちょっと何をやっておるんだと言われちゃうかもしれないです。

【大村知事】

ほんとうですね。なるほど。ありがとうございます。

それで、先ほど近藤博樹さんからの話をお伺いしましたが、こうした伝統建築の技術を受け継いでいくということについて、特に若い人たちに継承していくということについて、特に心がけていることはありますか。

【近藤（博）】

やはり高校に講義へ行っても、この仕事の楽しさだけを僕は伝えてあげたいなと思います。やはり自分がこうやって今あるのは、実は楽しさばかりじゃなくて、先ほど発表されたデンソーの方もそうだと思うんですが、実は裏ではかなりの苦労があると思います。結果を先に見てそこへたどり着く。それから、高校生に言うのが、目標とする人物を必ずつくってくださいということを言います。身近な人でこの人みたいになりたいよ、なったらもっと上の人を目指してくださいよ、そんなことを言って夢のある職業になっていただけるというふうに伝えております。

【大村知事】

目標の人を決めるというか、目標をつくるというのが大事ということでしょうか。

【近藤（博）】

自分はそう思います。自分でもやはりこの職業についてきたころは、もう10代のときになりましたので、甚五郎みたいになるんじゃないかと、自分の親方になりたいな、抜いてやろう、じゃ、もっと上の人を、そんな感覚で一つ一つ階段を上がっていくような状態で、そういうふうには。あまり大きな目標を最初からどんと掲げると、ちょっと手が届かなくて諦めちゃうのでいかん。

【大村知事】

それと同じようなことかもしれませんが、今の若い人に対して何か言いたいこと、メッセージはありますか。

【近藤（博）】

そうですね、我慢して頑張れと言いたい。

【大村知事】

それは確かにお願いします。どうもありがとうございました。

【司会】

どうもありがとうございました。

それでは、次の発表に移ります。最後に発表していただくのは、愛知県立豊田工業高等学校における人材育成の取組です。若山和彦校長先生、どうぞ前にお越しく下さい。

豊田工業高等学校は、「人あって技術あり」を校訓に、心豊かで創造性にあふれ、人間性を重視した人材の育成に力を入れており、昭和46年の開校以来、本県のモノづくりを支える多くの人材を輩出しています。今年4月には文部科学省からスーパー・プロフェッショナル・ハイスクールの指定を受け、航空宇宙産業や次世代自動車産業など、社会の第一線で活躍できる専門的職業人の育成を進めています。

それでは、発表をお願いいたします。

【若山】

皆さん、こんにちは。今ご紹介していただきました豊田工業高等学校校長の若山和彦と申しま

す。どうぞよろしく申し上げます。

では、早速本題のほうに入っていきたいと思います。本校は本年度からスーパー・プロフェッショナル・ハイスクール（SPH）という国の事業に指定を受けました。スーパー・プロフェッショナル・ハイスクールというのがどういうものなのかということなんですけれども、これが本校の教育目標の延長上にあるものだったんですね。ですので、本校が目指してきたもの、ここからお話をしていきたいと思います。

今日は工業高校の生徒もたくさん来ておりますけれども、どの工業高校でも同じように目指していると思います。製品というのが世の中に出てくるためにはどういうふうに出てくるかということなんですけれども、日本の頭脳はすばらしいので、研究者たちがいろんな開発をしていきます。すばらしいものを開発しますが、それがそのままでは製品として世の中には出てこないんですね。開発したものが大量に生産できるようにして、そしてそれが5年、10年と同じようなパフォーマンスで安全に動作する。そうしなければ我々の目の前には製品として出てこないんです。ですので、そこで研究者たち、モノを生み出すプロが生み出したものを、モノをつくり出すプロとして、そこで製品として世に出すと、そういう人材を目指して頑張っていこうというふうに本校は思っていたわけですね。

実際に本校卒業生がいろんな企業に入っていきます。世界的な企業に入っていく生徒もおりますので、私がちょっとその姿を見てみたいと人事の人に言ったんですけれども、その人事の方が、私も入れない場所にいるので、ちょっとお見せすることはできません、というふうに言われました。本社のすぐ近くに10名ほどおるということなんですけど、そのうちの7、8名はちょっと見られないと。そういうところで働いておりますので、今卒業していく生徒はそれを目指して頑張るなさいというふうに言っております。

SPHはここに社会の変化や産業の動向に対応するということを加え、そして先進的な卓越した取組を積極的に行っていく。こういうことを加えるとSPHになるわけです。そのようにしてやっていくんですが、では、どういうふうに取り組むかということです。したがって、本校の取組がベースになります。

まず、基礎基本の完全なる確立、それから思考力、行動力、すぐれた人間性の育成、これにずっと努めてきました。これは卒業した後、多種多様な製造業に行きます。全ての生徒に必要なものを全部身につけさせるわけにはいかないんですね。それから、将来どのように技術が変わっていくかわかりません。わかりませんので、このような目標を立てます。これは卒業した後、ずっと伸び続ける人材を育成しようと、そういうものなんです。

そして、こういうふうやっていくプラス、現代の社会に対応もしていこうというふうに本校は考えております。一つ言いますと、例えば自動車科があります。今ガソリンエンジンを一生懸

命勉強しているわけですが、今、道路を見ているとハイブリッドばかり走っていますよね。やはりハイブリッドの勉強をしなければ自動車科と言えないのではないかと、ということで教員たちは一生懸命頑張っているんですが、そうこうしているうちに今年トヨタ自動車が燃料電池車を発表するんですね。発売しますね。こういうふうにとんども変わっていくんですね。それに対応することが必要だということです。

それで、SPHはと言いますと、それにスピード感を持ってスケールアップする、これがSPHの取組だというふうに考えております。そのキーワードは連携ということになります。どうということかと言いますと、先ほど言いました基礎基本の完全なる確立、これを外すわけにはいけません。工業高校生というのはモノづくりというのを始めて最初の3年間です。基礎基本は絶対に必要です。これには時間がかかります。その下の思考力、行動力、すぐれた人間性、これも絶対外せません。こういうことをしながら、ではどのように対応していくかということ、いろんなところと連携をしていく必要、学校の中だけではいっぱいいっぱいですので、いろんな力を借りる、それが必要ではないかなと。

実はこのSPHをいろいろやりながら企業の方からこういうアドバイスを受けています。新しい技術、新しい機械がどんどん出てきていますが、高等学校で買うわけにはいきませんよ、買って買わなくてもいいですよ。買ったとしても、しばらくしたらまた古くなります、それは。もっと新しいものが出てきます。だから、設備投資は基礎基本の完全なる確立、ここにしっかり設備投資してください。今新しいものを見たかったら来てください。そして、自分たちの基礎基本がどうつながっていくか見てもらえればそれで十分達成できるのではないですかと、こういうアドバイスをいただいております。だからこそ連携だというふうに本校では思っております。

その連携を大きく分けると2つではないかなと。これは大ざっぱですけども、資質向上のためにより多くの機会を得る。生徒たちにはたくさんの経験をさせたいと。特に先ほど近藤さんも言っていたらっしゃいましたけれども、失敗することが実は社会へ出てからすごく大きな糧になってくるんですね。ですので、そういう意味での連携。

あとは先ほど言った自分たちの持っているものをどう将来につなげていけるのか指針となる、目的の先を見られる、そういう連携があるのではないかなと。それぞれ資質向上ではこういうようなところですね。後でまた説明をしますけれども、それから新しい技術というところでは企業とか大学さんと連携をしていきたいというふうに思っております。

では、具体的な事例をちょっとお話ししたいと思います。

今年に入って始まったばかりですので、まだ研究の段階が多くてなかなかありませんが、工業高校生というのは週3時間、課題研究という時間、少人数で自分たちの課題に取り組んでいろんなものを作っていきます。その課題研究は、今もう既にSPHとしていろいろやっております。

その中の一つです。SPHとしてやるんだったら何かもっと今までと違うものをやりたいと。作るだけではなくて、作ったもので何か勝負をしてみたいということで、缶サット甲子園というものに挑戦する班がありました。

缶サットとはちょっとわかりますかね。これはロケットなんですね。これに350ミリリットルのジュースの缶に電子部品を組み込んだ疑似人工衛星、それを搭載して、本選では高度200メートルまで打ち上げて、そこから落としながらいろんなデータを、ここは各学校のミッションなんです。いろんなデータをとる。とるといのは降りてからとってくるんじゃないくて、降りながら通信をしてデータをとっていく。そして、そのデータをどのように分析してプレゼンをするか。そこまでを競うものです。

本校のこの班は、ここに見えていますね、実は350ミリリットルの缶プラス、あそこにウコンの缶が見えますね。ここに圧縮空気と水が入っています。何をしたかといいますと、上空で虹をつくろうと。ずっと降りながら虹をつくる。虹をつくったものを、ここに少し見えていますね。ここにスペクトルの観測と書いてありますが、カメラで撮影してスペクトル分析をして、そのことによって大気の成分等がわかるのではないかなと。これがほかの惑星に行っても、そういうものを採用することで大気の分析ができるんじゃないかと、そういう取組です。

その取組をして、それが岐阜大会、初出場だったんですが、優勝をして全国へ行って、先週終わりました。残念ながら1位、2位というところはとれませんでした、アイデア賞をいただきました。

最もこの取組でよかったのは、1位、2位はとれなかったんですが、その当の本人たちがすごく悔しがっているということなんですね。1位、2位はやっぱりすごかったというふうに言っています。何がすごいかというと、出てきたデータの分析の深さがすごかった。それを言っていました。それを自分たちももっと準備すればできたはずだと。十分太刀打ちできたんだけど、それができなかったのが、やらなかったのが、そこまで準備できていなかったのが悔しいと。これはSPHの大きな収穫だと私は思っております。

もう一つ例を挙げます。ホバークラフトの製作、これは去年もやっていました。去年もやっていますが、去年は模型をつくったりなんか試行錯誤で、やっては失敗してやっては失敗して、そういう形でしたが、今年はSPHですので、連携をしていいですよということを話したところ、愛工大さんと連携をして、そこにいろいろな知識を教してもらったりなんかしているんですが、そのことによって、やはり大学ですので、実験をしますよね。実験をしながら完成を目指すという形に今なってきています。

これが先ほど言った、例えば開発室で研究者と一緒に何かをやっていく。それに随分近いものが出てきて、ここがちょうど実験しているところですけども、こういう取組に変わ

ってきています。工業高校生の良いところは、この実験器具も自分でつくっているということですね。自分でこれは作製しております。自分たちに合わせて作製しております。こんなようなことを今取り組んでおります。

そのほか、上2つは今お話ししましたけど、自動車科がカーデザインをしたいと言っておりましたが、当然空力等を考えないといけません。学校にはそんな風洞なんかありませんけれども、大学へ行ってそれをお借りすると。実はこの風洞を去年作って見たんですけど、課題研究で、やっぱりうまくいかないですね。失敗したそうです。ですので、今年はこれで何とかしたいというふうに言っておりました。

それから、もう一つ、その下の缶潰し器というのは、これは三好特別支援学校さんと連携をして、生徒さんたちの就業体験の訓練のものなんです。しかし、いろんな障害を持った方々ですので、どういう人でも使えるようにユニバーサルデザインということをしっかり考えて作るという、去年までにはない課題研究になっております。

あとちょっと離れて、ペットボトルロケットの工作教室、これは工業高校はどこでもやっているとありますが、本校ではこれの目的をコミュニケーションの育成、これをしっかりと目的の中に入れてやっております。小学生に工作教室をやるんですけども、小学生にどういう言葉を使ったら伝わるか、今伝わっているのか、今どう相手が思っているのか、それを考えながらやりなさいというふうに言っているんですね。それこそコミュニケーションの基礎の基礎だと思うんですね。そういう形で今進めております。あと2つについては、先ほど言った、見て自分の基礎基本がどうつながっていくかということがわかるというものです。

それで、あともう一つお話ししたいことがあるんですけども、こうやってずっとSPHの事業を進めていく中でおぼろげながらにわかってきたことが二つあるんですね。まず一つは、今、工作教室の話をしましたけれども、中学生で例えば技術家庭科の時間、技術の時間数が随分減っています。モノづくりということに触れる時間が減っています。ですので、工業高校というのはその地域でモノづくりのいろんなものを発信する拠点になるべきだろうと。そうならないかなければならないというふうになんか思っています。そういうふうになればいいかなと。これが工業高校としての地域貢献にもなるのではないかなというふうに思っています。

もう一つ、先ほど企業さんとの連携の話をしましたけれども、工業高校でできないから、卒業してからというのではなくて、やはり工業高校で勉強しながらそういうものを身につけられるといいのではないかなと思うんですね。企業さんと連携しながらやれる。もしそれがうまくいった場合、モノづくりの人材を工業高校でも育てながら、そして企業のほうでも育てながら、つまり日本の社会というのがモノづくりの人材を育てていくシステムを持った社会になる、何かできるんじゃないかなと、そのきっかけに本校がなればかなと。これもおぼろげながらですが、今少

し考えているところです。そうやってこのSPHが日本の全ての工業高校、そしてモノづくりに貢献できればというふうに、これから頑張っていきたいと思います。

どうもご清聴ありがとうございました。

【大村知事】

ありがとうございました。このSPH、スーパー・プロフェッショナル・ハイスクールは全国で指定されたのは2校だけということでございますね。

【若山】

工業高校は2校だけです。

【大村知事】

工業高校では、石川県立工業高校とこの豊田工業高校と2校だけということでありまして、その指定をされて、先生方と生徒さんとありますが、先生方の中でそういう指定を受けてからの変化というか、もちろん指定を受けるというのはちょっと前からわかっているということですが、指定を受けてこういうふうに行っているという意気込みというか、変化というか、そういったものはありますでしょうか。

【若山】

やはり去年までとは違っていて、まず連携できるということがありますので、外に行ける、つまり、自分たちの行動範囲が広がっているんで、意欲的にはなっていておりますし、生徒に対して今言ったようにいろんな工夫をする、または工夫した後でそれをいろいろ考察するということが考えさせようとしていると思います。私のところにもこんなことをやりたいんだけどということが随分来ていますので、大分意識が変わってきているんじゃないかなと思っております。

【大村知事】

生徒さんのほうはどうか。意識とか、変化とか、取組の違いとか。

【若山】

現在行っているのが、ああやって課題研究の部分なんですけれども、課題研究の部分で今お話ししたように、やっぱり物を作ってこういうふうなものができただけで終わらない部分が出てきておりますので、このほかにもいろんなものを作りながらも、いろんなアイデアを入れている生徒がたくさんおりますので、やっぱりそのところは変わってきているのではないかなというふうに実感しております。

【大村知事】

これはモノづくりの中心となる学校へという指定だということだと思いますが、先ほども言われましたが、地域とか企業さんとの連携という点では何か心がけていることとか、そういったことはありますでしょうか。

【若山】

地域としては、例えば小中であるならば本校が何かを貢献していこうということですね。今、少し困っているのが中学生なんですね。中学生は年が近いので、どうやることがうまく連携できるか。つい最近まで中学生だった者が1年生にいるわけで、どうやって連携していくかというのが、今アイデアをいろいろ募っているところですけども、地域貢献としては、たくさんアイデアを出してくださいと。どんどん言ってくださいというふうに種をもらっている最中です。ただ、それが必ずできるかどうかはわかりませんが、その種がまた違う形で花が咲いたりしますので、それがうまく地域貢献になればなど。

企業さんとはやはりゆくゆく就職してそこで働いていくわけですので、今自分が勉強していることがどれだけ将来つながっていくか、役に立っていくかということをしかりと肌で感じてほしいなど。そういう連携ですね。それができればいいかなというふうに思っております。

【大村知事】

最後にこれから次代のモノづくりを支える若い皆さん、若い方々、ほんとうにまだまだ中学生、中学校を出たばかりの高校生ですけど、そういった若い子たちへのメッセージとございますか、こうあってほしいという、そういうことについてメッセージをいただければと思います。

【若山】

日本自体がモノづくり大国ですし、愛知県はほんとうにその中心地だと思っています。知事も言われていますけど、航空宇宙産業、自動車産業はほんとうに中心になるものですので、そのモノづくりというものの楽しさ、大切さをしっかりとわかってもらいたいなど。それがやはり経験すること、又は作っていくことで自分に合っているんじゃないかと思えると思うんですね。私がこうやってやりながらも、自分はモノづくりのほうの人間だなというのをほんとうにつくづく感じますので、やはり小学校、中学校のところでモノづくりということにしっかりと触れて、自分の将来が見えるようになってもらえるといいかなというふうに思っております。

【大村知事】

ありがとうございました。

【司会】

どうもありがとうございました。

それでは、ここで今年11月に愛知県で開催されます技能五輪・アビリンピックあいち大会2014につきまして、愛知県産業労働部労政局技能五輪・アビリンピック推進室からご紹介をさせていただきます。

【技能五輪・アビリンピック推進室】

皆様、こんにちは。僕たちは技能五輪アビリンピックあいち大会をPRするスタッフです。よ

ろしくお願いします。

まずは今日一緒にクイズに参加してくれるこちらのアイチータを紹介したいと思うんですけど、こちらのアイチータはあいち大会2014のイメージキャラクターで、大村知事より広報大使に任命されました。このアイチータは世界で最も早く走り、器用に獲物を捕らえるチーターをモチーフにデザインされたもので、競技課題を制限時間内に取り組む技能五輪アビリンピックの選手たちをイメージして、開催地ここ愛知とチーターを合わせアイチータと名づけられました。

では、ここからのお時間はこちらのアイチータと一緒に技能五輪アビリンピックあいち大会2014に関するクイズを行っていきたいと思います。題してアイチータクイズ、ありがとうございます。では、早速いっていきましょう。

クイズに正解された方には、何とこちらのすてきなすてきな技能タオルをプレゼントさせていただきたいと思います。こちらの技能タオルは、技能五輪とアビリンピックの全職種、全種目のマークがデザインされたオリジナルのすてきなタオルとなっておりますので、是非ともよろしくお願いします。

ルールはとても簡単でございます。僕が今から出すクイズにマルかバツの2択で答えていただければと思っております。クイズの答えがわかった方は元気よく「はい」と手を挙げていただきたいと思います。そうしたら僕が指名させていただきますので、そうしたら答えをアイチータが教えてくれます。ぜひとも皆さん参加してください。

では、早速いきましょう。アイチータ、準備はよろしいですか。

では、いきましょう。第1問。今年の技能五輪・アビリンピックあいち大会2014が行われるのはここ愛知県である、マルかバツか。今年の技能五輪・アビリンピックあいち大会2014が行われるのはここ愛知県である、マルかバツか。さあ、1問目から難題でございます。さあ、わかった方。

では、元気に一番最初に挙げてくださいましたそちらのすてきな殿方に聞きましょう。そちらのマルかバツを挙げていただいてもよろしいでしょうか。では、答えはマルということですけど、アイチータ、答えはどちらですか。マル、大正解。おめでとうございます。技能タオルをプレゼントします。もちろんあいち大会でございますので、ここ愛知県が開催会場となっております。

さあ、という感じにやっていきたいと思いますので、続いて第2問。技能五輪・アビリンピックあいち大会2014までのカウントダウンイベントが開催されます。今年の9月の6、7日に行われるのですが、その会場はオアシス21である、マルかバツか、という問題ですね。こちらはきつと皆様のお手元のチラシにヒント、もとい、答えが書いてあると思いますので。そちら、早かった。お父さん早かった。さあ、こちらの4列目のシャツのお父さん、マルということですけど、アイチータ、答えはどちらですか。マル、おめでとうございます。

こちらはカウントダウンイベントが9月6日、土曜日、7日、日曜日の2日間に開催されます。ですので、ぜひご来場くださいませ。そして、詳しい内容はチラシに書いてありますので、そちらを見ていただければと思います。

さあ、続きまして第3問。こちらのアイチータの頭には書いてある文字はa i c h iという文字が入っている、マルかバツかという問題です。アイチータの頭にはa i c h iという文字が入っている、マルかバツか。

さあ、いっぱいいる。アイチータのうちわを持っていた方、では、答えはどちらでしょう。マルということですけど、アイチータ、答えを教えてください。マル、大正解。おめでとうございます。

こちらはあいち大会のイメージキャラクターですので、もちろんa i c h iと入っております。こちらは先ほどもくるくると回ってもらいましたが、アイチータ、後ろを向いていただいていますか。こちらですね。頭の後ろにもしっかりとa i c h iという文字が入っております。

ということで、以上アイチータクイズでした。ありがとうございます。

本日は、貴重なお時間をいただきありがとうございます。これからも技能五輪・アビリンピックあいち大会2014に向けて愛知県内のイベント会場でPRしてまいります。皆様も11月に開催される技能五輪・アビリンピックあいち大会2014を会場まで見に来ていただきたいと思います。では、本日はほんとうにありがとうございました。

【司会】

それでは、最後に知事から本日の会の全体を通じての感想など、コメントをお願いしたいと思います。よろしく申し上げます。

【大村知事】

今日はどうもありがとうございました。株式会社デンソー技研センターの塩崎部長、また田上さん、高峰さん、ありがとうございました。また、コンドウ建築の近藤博樹さん、孝則さん、ありがとうございました。また、豊田工業高校の若山校長さん、ありがとうございました。大変素晴らしいプレゼンテーション、発表をいただきまして、大変興味深く拝聴をさせていただきました。皆様のお力でさらにまた若い人材を次の世代、次の愛知の産業を担っていただく、モノづくりを担っていただく若い世代を大いにまた育てていただきますようお願いを申し上げます。

その上で、当面は何といってももう100日を切りました11月の後半の技能五輪全国大会とアビリンピックの全国大会、このあいち大会2014を皆さんと一緒に成功させていきたいというふうに思っておりますので、よろしくお祈りを申し上げます。

ちなみにシンボルのアイチータも大分定着をしてきたと思いますが、このデザインはプロの方

ですが、アイチータという愛称は蒲郡の塩津中学校の生徒さんにつけていただいたということでございまして、私、ちょっとだけ申し上げますが、このアイチータは非常にデザインはいいんですけど、着ぐるみにすると、もうちょっと手足を長くしたほうが良かったかなと。

最近の着ぐるみで言いますと、ふなっしーが何でうけるかという、あれは飛ぶと。私はアイチータに飛べと言っているんですけど、あれちょっと10センチぐらいかな、浮くのが。私の地元の高浜のとりめしのキャラでめしどりくんというのがいるんですけど、あれはもうちょっと飛ぶんだ、これが。3回ぐらいやると中に入っているやつがばてちゃうけど、飛ぶというのがこれからの必須アイテムなので、ぜひ次に改良版をつくるんだったらもうちょっと手足を長くして飛べるようにしてくれと言っているんですけど。それはそれといたしまして、ほんとうにありがとうございました。

また、途中でかな削りもやらせていただきましてありがとうございます。子供のころやった覚えがあることですがけれども、あんな薄く削れると。最初にやったら確かにちょっと続かなかった。ぶちっと切れて、しまった、これはもうちょっと押していかないかなと思ったら、ちゃんと削れましたので、昔を思い出して楽しかったです。ありがとうございます。

いずれにいたしましても、やっぱり世界中でこれだけモノづくり、製造業が発達をした国というのはそうなくて、モノづくり産業、製造業が国の産業の代表だというのはまさに希有な例と言ってもいいと思います。

これはやはり人間でなきゃできない。そして、人間のために作っていくものだと思いますから、そのよい伝統といいますか、これを引き続き我々はしっかり引き継いでいきたい。そして、その日本のモノづくり産業を何といても断トツにリードしているのは我が愛知、愛知の皆さんの力だというふうに思っております。その力を存分に発揮してPRしていくためにも、11月の技能五輪を何としても成功させていきたいと思っておりますので、今日、お集まりいただきました皆さんとともにしっかり頑張っていきたいと思っております。今日は、ほんとうにどうもありがとうございました。

— 了 —